総評

柳田　邦男

荒川区主催の柳田邦男絵本大賞が、今回で十五回を迎えました。

十五年という歳月は、小学校一年生だった子が大学三年生になって専門的な学問を学ぶようになるほど成長するに至るとても長い日々です。

この絵本大賞の事業がこんなにも長く続けられたのは、区内の小中学校の呼びかけで、子どもたちが年齢にかかわりなく絵本に目を向け、読んだ感想や印象深く感じたこと、新しい気づきや学びなどを、私宛のおたよりのかたちで書くのを、毎年毎年続けてくれたことが、いちばんの理由です。さらに二ばんめの理由は、保護者や一般の人々が、子どもとは違う視点からの絵本をめぐる思いを、おたよりとして書き続けてくれたことです。

しかも、寄せられるおたよりは、はじめのころは、毎回数百通でしたが、第八回からは一千通を超えるようになり、第十五回の今回は、前回よりも百通余り多いこれまでの最高の一七〇四通にもなりました。特に子どもの部の応募数が圧倒的に多く、一六六七通を数えました。残念なことに、一般の部の応募数は、前回の半数以下の三七通に止まりました。

子どもたちのおたよりから見えてくるのは、取り上げた絵本の内容が、実にバラエティに富んでいて、広く読まれている古典的な絵本に限られていないということです。そして、絵本から受けた印象や学びは、実にのびやかで、こんなところに強い印象を受けたのかと感心させられるものが多いの

です。

特に注目したのは、絵本のなかの印象的な言葉や場面から、自分自身のこころを見つめなおして、自分のこころの持ち方や生き方をしっかり考えるようになったことを書いたおたよりが少なくなかったことです。これは絵本に限らず広く本を読むことの意味を示すものです。

もう一つだいじなことは、本を読んだ後、感想や印象や学びや感動した言葉を、誰かに読んでもらおうという思いで、書いてみることです。もし書きとめなければ、日がたつうちに消えてしまいます。しっかりと書きとめると、感じたこと学んだこと考えたことが、自分の頭のなかにきちんとした文脈（意味のある文章の流れ）になって刻まれるのです。そういう書く習慣を身につけると、どんどん知識や考える力がつき感性が豊かになり、こころが大きく成長するのです。

一千六百人以上もの子どもたちが、絵本の読後感を書いたということは、全国的に見ても荒川区以外には見られない「絵本の家庭文化」がしっかりと根づいたことを示すものです。十五年前に西川太一郎区長の提唱で始められたこの事業は、区内の子どもたちの心の成長に寄与しているに違いありません。

これからは、幼稚園・保育園の幼い子たち、中学生たち、そして大人たちの応募数が大幅に増えることを期待します。